

名古屋大学教育学部 2008年度 後期

教育方法学講義I

- 教育方法概論 -

第2回 講義資料 W

担当 柴田好章 (教育方法学・准教授)

実践にとって実践学とは？ —学問的探究と実践との関わり—

関連する教科書の記述箇所： 1、2、4章

理論と実践との関わり

A 実践における理論の役割

A1 理論の役割は、実践における意思決定の根拠を提供すること

なぜ、・・・だといえるのか？ なぜ、・・・をするのか？

A2 ただし、いつでも、どこでも通用する、「こういうとき（条件）は、こうすべき（帰結）」を明らかにするのは難しい（無理）

なぜか？

B 理論の構築と適用のあり方

B1

- 理論→実践 (当為)
 - ※ 経験のうらづけのない規範 「・・・はずだから、・・・べきだ」

B2

- (理論) 仮説→実践(実験) →記述→理論→予測→実践
 - ※ 仮説検証型パラダイム
 - 予測の精度の高い理論(法則・命題)がめざされる
 - 多数の事例の共通
 - 予測の精度を高めようとするれば、個別性がみえてこなくなる
 - 要素還元的な見方・・・<析出>
 - 制御可能な要因(外から変化させられうる要因)が中心
 - 仮説の枠の外にある事実の軽視・・・統制すべき対象、あるいは誤差

B3

- ◎ 実践→記述→理論→見通し→実践 ※柴田の現在の立場
 - ※ 理論を作る 理論から見通しを得る には、力量が必要
 - 示唆に富む理論構築がめざされる
 - 授業諸要因の関連構造(名古屋大学教育方法研究室)
 - 実践の個別性を重視
 - 個別の中に可能性を追究 授業とは? 子どもの発達とは?
 - 関連構造的な見方・・・<顕在化>

C 豊かな教育実践を導く理論とは?

- ◎ 実践の個別性・具体性・一回性、今・ここで、その時その場で
 - ◎ 一般性、客観性、再現性、普遍性
- この2つを、相反するものとしてではなく、同時に追究すること。
これは、教育学にとっての"難題"。

D 学問的探究とは?

つまり _____